

第7章 震災・原発を考える本

『マイケル・サンデル 大震災特別講義 私たちはどう生きるのか』
マイケル・サンデル著 NHK出版 2011

特別講義—国境を越えて交わす議論

ハーバード大学教授マイケル・サンデルの人気講義「正義 (Justice)」が、ハーバード大学史上、初めて一般に公開され、その模様は日本でも放映され大きな反響を呼んだ。

マイケル・サンデルは、2011年3月11日に起こった東日本大震災で深い悲しみと絶望の中で、手を携えながら前を向き、混乱の中でも助け合い、冷静さを失わなかった日本人の姿に感動した。そして、日本が直面している試練を世界全体の問題として捉え、共に再生への手がかりを模索すべきだと訴え、日本人を励まし、希望と再生の道を探るために、日本で起きた大震災と世界の反応をテーマにした特別講義を行った。

講義は、大震災から約1か月後に、インターネット中継によって行われた。参加者は、東京、ボストン、上海のそれぞれ8名の大学生グループと、東京から参加した4人の特別ゲストである。

本書は、その特別講義の模様を放送したNHKのテレビ番組を書籍化したものである。

東日本大震災は人類にとってどのような意味があったのか

講義はまず、震災直後の日本人の行動を海外の人々はどう受け止めたか、ということから始まる。地震が起きた時、日本人が何を考え、どういう体験をしたかについて、日本人ゲストに問いかけると共に、海外のメディアや学生たちが、地震が起きた時の日本の人々の行動はどう見え、どう感じたかについて述べる。

そこから、社会で共に生きていくということは、どういう意味を持つのかということや、コミュニティに対する忠誠心より、家族に対する忠誠心が優先するかについて議論される。その議論を通して、日本人が見せた際立った公共性、秩序、冷静さ、略奪や便乗値上げなど考えもしないコミュニティへの連帯意識は、日本人だけに特有のものかを問い、政治哲学の問題に移して考えさせる。

その後、震災直後の日本人の反応は、アメリカやヨーロッパについて指摘される「個人主義」と対照的なものだと言えるか、それはコミュニタリアン的な精神だと言えるか、そしてそれは、個人と共同体のいずれを重視するかという二つの価値観が、目に見える価値観として現れたものだろうか、という議論に進む。

それに対して学生からは、個人主義はどこにでもあるもので欧米に特有のものではない

という答えが出る。そこからサンデルは個人主義と共同体意識に焦点化し、強い公共への倫理観は、多様性の欠如というマイナス面はないのかとたたみかけ、議論を深めていく。

原発事故に潜む問題とは何か

次にサンデルは、原発に焦点を当てる。最初に、原発での作業にあたる人々の英雄的な行為に焦点を当て、危険な任務は誰が担うべきか、危険な任務に立ち向かう人々は何を基準に選ばれるべきかが議論を進めていく。

学生の意見をもとに、専門的な技術は必要ないが危険な任務に対して高額な報酬を提示するのは正義に反するか、あるいは、報酬を与えて人を募ることは合理的かという問いを、3つのグループの学生に問いかける。そして、それぞれの学生の意見を集約して次にゲストにも問いかける。その議論から哲学的なジレンマを提示させ、次の問題提示に向かう。

この過程で読者も自然に議論の輪に加わっていくことができるだろう。

次に、今回の福島第一原発の放射能漏れの事故を受けて、今後私たちが原子力とどう向き合うべきなのか、リスクを承知しつつ原発に依存するのか、あるいは廃止・削減の方向へ大きく舵を切るべきなのか、すなわち、エネルギーと原子力のあり方をどう考えるか、私たちの生き方は原子力とどう関わっていくべきなのか、という問題に焦点を当てる。

これらの問題について、学生とゲストのそ

れぞれの意見を導き出すことにより、参加者はこの問題について非常に多くの論点があることに気付かされる。

支援を通して、世界のあり方が変わるのだろうか

今回の大震災に際して、国際的な援助の手が続々と差し伸べられた。その支援を通して、今後の日本とその国や地域との関係、あるいは世界のあり方が変わる可能性について議論が行われる。

まず、切り口として日本と中国との関係を取り上げ、何が変わり、何が変わらないのか議論が展開される。そして、日中間の特定の問題から、よりグローバルな倫理観や責任、アイデンティティとその共有というより広い哲学的な問題へと議論が進んでいく。

サンデルはここで、人間の共感と関心はグローバルにはなり得ない、というジャン・ジャック・ルソーの言葉を取り上げる。

ここから議論は、人間の他者への共感はどうしても限定的なものになるのか、あるいは、普遍的な倫理道徳に向かっているのか、という方向に向かう。そして、今回の危機に対するグローバルな反応や支援の広がり、コミュニティの意味やその境界線が変わりつつあること、広がりつつあることを示しているのではないかと結ぶ。

国境を越えて行われた今回の特別講義が日本の人々への励みになれば、というサンデル

の願いは、私たち日本人の心に確実に届いたと言えるだろう。

グローバルなコミュニティの構築

本書の最後に、東日本大震災直後、日本を支援するためにハーバード大学で立ち上がった組織「ハーバード・フォー・ジャパン」が開催したシンポジウムにおけるサンデル教授の基調講演の内容と、その後の質疑応答の内容がまとめられている。

この中でもサンデルは、東日本大震災が、私たちによりグローバルなコミュニティの考え方を再構築させ、共同社会を発展させる役割を果たすことになるかもしれないと述べている。そして、今回の震災について、日本で率直で思慮に富んだ議論のあり方が世界の手本となると同時に、日本にとっても、より強靱な民主主義を築く機会となるはずだと結ぶ。(滝澤 雅彦)

『大津波と原発』

内田樹・中沢新一・平川克美著

朝日新聞出版 2011

人間の限界に目を向ける—平川の人間観

本書に収録されている鼎談は、2011年4月5日に「いま、日本に何が起きているのか？」と題するインターネットラジオの番組で配信されたものがもとになっている。

東日本大震災から約1か月が経って、日本

中の関心が被災地と原発に向けられ、さまざまなメディアで大量の発言がなされていた。しかし、最も重要で中心的だが看過されている課題があり、それは思想の問題であった。この思想の問題について、まだ誰も真正面から向き合っていないという忸怩たる思いに駆られていたラジオ・パーソナリティの平川克美が、この問題に対して語れる思想家として内田樹と中沢新一に呼びかけて実現したのがこの鼎談である。

平川は、原発を経済効率という観点からだけで見ることの背後に重大な見落としがあったと考える。それは、私たちの世界には、私たちが想像もできないような出来事があり得るという、科学技術の限界の問題について考えることであり、同時に、人間は良かれと思っただけでも必ず過ちを犯すものであるという、人間の行動の限界について理解を深めることであると言う。

それはすなわち、私たちは何が解っていて何ができるのかということ考えると同時に、何が解らなくて何ができないのかということを考える謙虚さを欠いていた、ということである。平川にとって思想の問題とはそのようなことである。

そして、エネルギーや水や空気について、損得や経済効率とどのようにしたら切り離して論ずることができるのか、ということこそ、今立ち上げなければならない思考であると考え、この鼎談がその第一歩となれば幸いと結んでいる。

霊的力による再生プログラム—内田の文明観

一方、内田は、原発事故の根本にあるのは、現代日本人の「霊的な力」に対する畏怖の念の欠如であると考え。鬼神を祀らないと祟りがあるという信憑を持たない社会集団は存在しない。なぜ人類が鬼神という概念を持つようになったのかについて、内田はその機能を「センサーの感度を上げる」と表現する。

人類の祖先が数万年前に持った「死者」の概念と「存在しないものが切迫する」という実感。それを手がかりにして、人類は、自らの身や生存にかかわるかもしれない危険が接近してくるときに「アラーム」が鳴るように心身を訓練してきたと内田は言う。そして、内田は、人類がその力を基礎に文明を構築したと捉える。そこから、人間が犯す人間的過失のほとんどが、この「アラーム」の機能不全から起きていると考える。

現代社会は、このようなことを一笑に付す合理主義者、数値至上主義者によって占められている。また、安全で豊かな社会ではこのような「アラーム」は不要である。

しかし、人類史のほとんどの時期は、安全で豊かではなく、窮乏と危険にさらされて生きてきた。だからこそ人間は窮乏と危険に対処できるよう能力開発を行ってきた。それを怠った人間たちには「罰」が下った。

この意味で、内田は今回の震災と原発事故に「アラーム」の劣化が大きく関わっていると考えている。そして、21世紀を日本人が生き延びるためには、もう一度「霊的再生」のプログラムについての対話を始めるべきだと説く。

エネルギーの提唱—中沢の自然思想

他方、中沢は、津波と原発事故が全く異なる事情であると捉えることから始めて、被災地の人々が津波のような自然現象に対しては、乗り越えることが可能であると見る。しかし、原発の問題に関しては、これまでの日本人の思考方法の中にはノウハウがないと考える。

建屋に向かって消防車が放水している写真を掲載したフランスの新聞は、このことを「プリコラージュ」と書いた。フランス人は、野生の思考である「プリコラージュ」で原発に対峙していると見たのである。

レヴィ・ストロースは「日本人はプリコラージュを駆使しながら、ものづくりをする素晴らしい民」と言った。しかし、中沢は、原発にさえ「プリコラージュ」をしてしまうところが日本人であると言う。

なぜなら、原子力発電の存在構造や、原子力発電を生み出した根源の思想、さらにそれを取り囲んでいなければならない安全システムなどの問題については、日本ではほとんど無思想のまま進んできてしまったからである。

また、中沢は、科学的・歴史的に見て、原子力が第七次エネルギー革命に相当すると説く。この第七次エネルギー革命は、生態圏の完全に外にあるエネルギー源を取り出そうとした点が、それ以前のものとは決定的に構造が異なる。

さらに、この革命の一番の問題点は、大量生産と大量消費による経済成長を求める産業界と結びつき、ひとつの盲目的なイデオロギーを形成してきたと指摘し、これが一神教の思考法の変型判であると捉える。

日本はもともと一神教ではなく神仏習合の宗教観であったことから、原子力エネルギーを技術的なレベルでは制御できても思想的にはできないと言う。そこで、エコロジーを乗り越えていく力を持った、第七次エネルギー革命を日本人の内部に組み込んだ思想を「エネルギーゴロジー」と名付け、東北を変えていこうと提案する。

そしてそのために、国民的なエネルギーの統合を目指して、自ら「緑の党」のような日本の自然思想に立脚した新しいタイプの組織を立ち上げることを宣言している。

(滝澤 雅彦)

『津波と原発』

佐野眞一著 講談社 2011

津波は天罰か

本書は、ノンフィクション界の大御所である佐野眞一が、東日本大震災直後の津波と原発の被災地に駆けつけ、自ら取材を敢行した渾身のルポルタージュである。昨年、胸の大病を患ったばかりの著者が、健康不安があるにもかかわらず被災地に赴く決心をしたのは、石原慎太郎をはじめとする著名人のコメントに怒りを覚えたためだというくだりから話が始まる。

東京都知事の石原が、今回の震災について「これは天罰。津波をうまく利用して日本人の我欲を一回洗い落とす必要がある」と語ったのに対して、著者は「その我欲を絶賛した

小説で華々しくデビューしたのは石原本人ではなかったか。天罰が下るといふなら、石原の方にこそ下らなければならない」と激しく憤る。筆者は被災地の出身であるが、佐野の意見に全く同感である。佐野を被災地に向かわせた、「今回の大災害を論評する連中の言葉には、被災者たちの沈黙に匹敵するだけの重みも深みもなかった」という怒りへの共感が、かれのまなざしへの信頼につながっていく。

第一部は、宮城・岩手両県における、震災から一週間目の被災状況が描かれている。佐野は、気仙沼や陸前高田の被災現場に入り、そこに熱もなければ声もなく、「人間の生きる気力を萎えさせ、言葉を無力化させる瓦礫の山しかない」ことに目を見張る。それは完全な廃墟で、「人間が生きたという痕跡さえなかった」のである。

かれは、わずかな情報を頼りに、被災したはずのかつての知人たちの消息を尋ね歩く。幸いにも彼らはみな無事で、「その時どうしたか」「その後どうしているか」を赤裸々に語る。ここに登場するのは、私たちが報道番組で何度も目にしてきたような、テレビカメラを向けられて淡々とインタビューに答える、よそ行き顔をした「被災者」たちの姿ではない。

佐野の知己であった新宿ゴールデン街の元名物経営者は、地震発生後、通帳とお金、そして公共の財産である図書館の本をしっかり持って、いち早く高台に逃げるしたたかさを発揮し、かれをうならせた。宮古で“定置網の帝王”の異名をとっていた漁師は、一艘一億五千万もする船を、津波で五艘失った。かれは震災以来酒を切らすことがなくなり、呂

律の回らない舌で、もう日本の漁業は全滅だと嘆いて、人目をばかすることなく嗚咽した。

また日本共産党の元文化部長は、病室を襲った津波にずぶ濡れになりながらも何とか生き延びたが、救助に来た若い自衛隊員が配給してくれた毛布を片時も手放すことなく、それまで自衛隊は憲法違反だと言い続けてきたのは間違いだったと「転向」する率直さを見せ、佐野を驚かせた。取材対象者との距離感が近いせいだろう、一般の新聞報道などとは違い、確かにそこで生活していた被災者一人一人の肉声と息づかいが、ありありと感じられるインタビューに仕上がっている。

福島原発の光と影

第二部は、日本人が遭遇したもう一つの大災害である、福島第一原発事故の問題を取り扱っている。第一章は、福島原発の立ち入り禁止地区内での取材報告、第二章は、日本に原発を導入した「原子力の父」正力松太郎の野望について、そして第三章は、なぜ「フクシマ」に原発が建設されたかの周辺取材から構成されている。

福島第一原発の半径二十キロ圏内が立ち入り禁止となった三日後、佐野は逮捕覚悟でその地区に足を踏み入れる。そこは、まるで夢の中に出てくるようなゴースタウンだった。アーケードの入り口には、「原子力明るい未来のエネルギー」「原子力正しい理解で豊かにならし」という大看板が、皮肉のように掲げられていた。

取材の結果、佐野は原発の被災者と津波の被災者の切迫感の違いがあることに気づく。

原発の被災者にいま一つ切迫感が感じられないのは、津波と異なり、放射能が「見えない」ものであるからかもしれないとかれは考える。被曝の恐ろしさは、気づかぬうちに内面まで蝕まれていくことであると佐野はいう。現在、被曝の不安という深刻な問題に直面する日本人の多くが、佐野の感じたこの不気味さを共有しているのではないだろうか。

日本にはじめて原発を導入した正力松太郎は、国会質問で「核燃料」を「ガイ燃料」といって失笑を買うほど、科学的知識に疎かった。しかし、そんな正力の「総理大臣になりたい」という政治的な野望が、アメリカのしかけた原子力平和利用ブームと結びついて、結果的に日本の高度経済成長を大きく促進したことは否定できない。

私たちの知的怠慢

いま、「なぜこんなに危険な原発を、狭くて地震の多い日本に導入したのか」と正力の判断を呪う国民も少なからずいるかもしれない。しかし、当時の日本は、敗戦によって国土面積の約三倍あった満州を失い、戦地から復員兵が続々と帰還し、人口が急カーブで増加していた。資源の乏しい日本が復興を遂げるためには、当時「安全で安価」と信じられていた原子力発電を利用するほかにないと正力が考えたことを、もはや経済成長が望めない少子高齢化社会に生きるわれわれが批判するのは、フェアでも生産的でもない佐野はいう。現状を招いたのは、物質的繁栄だけを享受して原発労働者に思いをいたす想像力を忘れた、私たちの「恐るべき知的怠慢」だという佐野

の言葉が、胸に突き刺さる。

福島第一原発の建つ大熊町周辺は、かつて「海のチベット」と呼ばれた不毛の地であった。そこへ原発を建設するために、いかに地元政治家や東電が働きかけたについての記述は非常に興味深い。貧しい東北の農村にとって、原発はまさに希望の光をもたらす救世主となった。しかし、その希望の光には、青白いチェレンコフ光がひそんでいて、四十年の繁栄ののちに住民から故郷を奪い、かれらをさまよえるジプシーに陥れたのである。

今回の三陸大津波と福島原発事故は、日本の近代化がたどった歴史と、戦後経済成長の足跡を、二つ重ねてあぶりだしたと佐野はいう。この両方を目撃してきた世代の佐野が、日本が復活できるかどうかは、これまで歩んできたものとはまったく別の歴史を、私たちがつくれるかどうかにかかっているという。この問いかけの意味は、深く重い。

(澤 智恵)

『原発報道とメディア』

武田徹著 講談社現代新書 2011

パンドラの箱

2011年3月11日の大震災以降、私たちは多くを経験した。原発事故、放射能汚染、風評被害、そして大勢の人の死。それらの出来事は報道され情報として世界を駆け巡った。繰り返される映像、「現時点では…」という言葉に代表される、から回りする記者会見の中継を見る度に募る本当の事がわからないもど

かしさに、私たちは政府やマスコミに対して得も言われぬ違和感や不信感を抱いた。そして、ジャーナリズムはどこに軸足を定め、どこを向いて、何を伝えているのか、あるいは伝えてきたのだろうか。ジャーナリズムとは何か、メディアは何を語ろうとしているのか、と私たちは今も問い続けている。

本書は原発事故を通してジャーナリズムの本質とそのあり方を明らかにするものである。武田は「原発事故はパンドラの箱を開き」結果的に「以前から日本社会が宿していた歪」を浮かび上がらせたと言指す。マスメディアが内包する問題もこの「日本社会が宿していた歪」に含まれよう。

本書は、知らせることは正義なのか、原発事故とツイッターとの関係、既存のメディアと進化するソーシャルメディアが作り出す新しいメディア地図の読み方と今後、情報操作の現在景など、ジャーナリズムが定める軸足を捉えながら、メディアの今を映し出している。

ジャーナリズムは公共性に奉仕するもの

武田はまず、人が生きていられる「安全」「安心」をジョン・ロールズのいう「基本財」(どのような生き方をするにしても必ず必要となる権利、自由、(雇用や教育)、収入など)として捉え、ジャーナリズムの未来における希望とは「基本財としての安全、安心の実現に向けて社会を導くことができた時ではないか」と問いかける。

「基本財としての安全、安心の実現」はもちろん容易ではない。原発においては、推進

派と反対派の二つの共同体があり、それぞれに人の集団と科学者やメディアが配置されているが、武田は、このような構図が存在する要因として、双方の安全、安心観のずれを指摘する。ハンセン病隔離政策を例にすると、ハンセン病患者がいない社会が安全と考えた多数派が患者を強制的に隔離した。だがその結果、療養所は機能せず、患者は人権さえ脅かされる扱いを受けた。

この例から、安全、安心という正義が暴力に変わり得ることがみえてくるが、武田は、ジャーナリズムはこの事を批評的に報じるべきで、暴力の担い手に決してなってはならないと主張する。安全や安心はだれにとつての安全、安心なのか、市民か、為政者なのか。それを検証するのがジャーナリズムの使命である。ジャーナリズムは公共性に奉仕するものなのである。

そのような検証をするにしても、専門知識は重要である。しかし、日本では科学ジャーナリズムが未成熟で、そのため優れた技術に支持が集まらない、特に原発報道にみられるように危険性ばかりが強調され不安感を植え付けるので、科学技術政策が進まないと、官僚たちは考えていた経緯がある。この考えは完全に間違っていたのであるが、ジャーナリズムの専門性欠如という問題は存在する。

今回の原発事故でも、記者会見や報道番組において専門知識で切り込むジャーナリストがいかにか少数であったかは明らかである。しかし武田は、専門知識は必要条件だが、十分条件ではないという。「専門知識そのものの位置付けや社会的、歴史的文脈に着地させた場

合の評価が更に重要」であり、知識をどのように生かすかを考える姿勢を求めている。

知らせることは正義なのか

原発関連の情報公開で、知らせる、知らせないが議論になった。ジャーナリズムの起点は報道すること、知らせることである。では、全て情報を知らせて（全ての情報を知らせることは当然不可能であるが）判断を問うというマスコミはその使命を果たせるのであろうか。

確かにこれまでマスコミは国策の一端を担い、原発について多面的な報道をしてこなかった。そして今回の事故において、当初、発表報道に偏った。また安全性の面からの取材の自主規制もあり、調査報道が充分行えなかった。そのため、ニュースが類型化、共通化し、国民には何か隠しているのでは、本当の事を伝えていないのではないかという不信感が募った。これらの事はメディア自身の手でこれから検証されていかなければならないことである。

武田は知らせることが安全と安心への実現を促すかを例示しながら、「健やかな非知の議論」を提示している。つまり、知ることが不安を引き寄せ、危険の原因になる可能性が人間のリアリティーであるとし、「ジャーナリズムは、危険を正しく知る、安全を正しく知らせることの重要性を認める一方で、『健やかに知らないでいる』ことの価値にも一瞥を与える」ことの必要性を指摘しているのだ。

当然、ジャーナリストはこの判断において「最善を尽くす使命」を担っているが、「事実

さえ知らせていけば報道に間違いがあるはずがないと考えるのは短絡的で、事実をどう知らせたか、あるいは、それを本当に知らせるべきだったのかが問われる」と主張する。ここは議論が分かれるところかもしれない。しかし、情報の受け手であると同時に社会において情報の発信者でもある私たちは、メディアリテラシーを習得しつつ、これらの議論に積極的に参加することが求められているのである。このことは、著者からの本書を通じてのメッセージの一つとして受け止めたい。

最後に。メディアの未来地図という観点から、ソーシャルメディア、ネットメディアの存在は見逃せない問題である。しかし、ここでも武田は、皮相的なマス VS ネットではなく、新しい議論を提示する。両者の区別を乗り越え、前者を「歴史メディア」後者を「現在メディア」と捉え、可謬主義を核とした「相互補完的システムとして構築」していくことが重要であるという議論である。

さらに、林香理が述べているような、新聞の生活家庭面に載る「オンナ・コドモのジャーナリズム」にその可能性を見出している。それは「正義の論理」ではなく一緒に解決法を考え、公益性へ繋げていく「ケアの倫理」である。メディアの世界は生きている。報道は、その使命を糺しながら確かに変わっていくであろう。

(小林 良枝)

『危機の思想』

西部邁・佐伯啓思編著 NTT 出版 2011

『表現者』の論客たちの思想的立場

本書『危機の思想』は、大震災発生後 100 日を経た時点で、雑誌『表現者』を拠点として言論活動を展開している思想家・9 人によって、この大震災がもたらした「国家の危機」に対する提言の書である。『表現者』は主幹・西部邁を中心にした思想家グループの雑誌で、その前身『発言者』を含めると過去 17 年に及び、政治・経済・社会・文化の全域にわたって、真正保守思想を標榜し、既成の言論と世論に挑戦してきた。

9 名の執筆者たちは、現代を「危機」が個人にも国家にも押し寄せていて、いつ転落の憂き目にいあうかしの時代だと捉える。その危険を回避するには「綱渡り」にも似た、あるいは「尾根伝い」にも似た平衡感覚を常にもつことがなにより重要であるとする。精神の平衡術は歴史の英知としての伝統の中に堆積されており、人間が矛盾のなかで生き抜くための示唆を与えてくれている。「歴史」「伝統」に学ぶことこそが、転落の憂き目から免れるための処方であり、そこから「文明の成熟」はおとずれる。だから、「文明の成熟」は、つねに保守的な性格のものとなるというのが彼らの一貫した主張であり、政党における「保守」とは別のものである。

その上で、彼らの関心はあくまでも現実社会にあり、目の前に繰り広げられる政治・経済・社会・文化のリアルな諸問題・諸現象で

ある。

そしてこれら諸現象に言及する時、彼らはその背後にある歴史観、文明論、文化論、国家論から問い直す。様々なレベルが交差するこれら諸現象の本質へと思考を深く下降させていくので、いきおい彼らの思考はアカデミックな様相をとる。その上で再び現実的な諸問題へと言及を浮上させ、ジャーナリスティックな論戦をはるのである。それは、あたかも雨水が地底の底の岩盤をくぐり、ろ過され、再び地表にわき出てくる清水のような回路をとる思考方法なのである。彼らのこの17年間の言論活動は、アカデミズムとジャーナリズムを切り結ぶ意欲的なものであった。近年の、流行に流され思いつきのその時その時の気分によるマスコミュニケーションの世界においては、まさに挑戦的であった。本書の出版にあたっては、大震災の危機的状況への彼らの発言・表現は、これまでの己らの思想の真価が試されるものだとの覚悟を述べている。

「想定外」に直面した技術文明

とてつもない災害をもたらした今回の原発は、18世紀以降の近代主義、技術主義の極致であり、その理念や思想が240年後にその限界を示し、近代文明への問いかけであるとまずは認識する。

18世紀の哲学者・カントが、人間の理性が自然の中に法則を見出すことによって、自然に立ち向かい、自然を支配することができるとする西洋近代思想の基を生み出し、自然の猛威に絶望的な恐怖を抱いていた人々を救済

した。その思想が今日の文明の繁栄へと繋がり、私たちに幸福をもたらしたとする近代文明論。

だが『危機の思想』の論者たちはつぎの点に注目する。カントが自然を支配すると言う時、カントは自然現象の中に「崇高」な何か「神的な何か」を見ていたのであり、崇高な感情をもって自然を「支配」をしたのだと言う。

同時にまた、カントは人間理性に対しても人間理性の限界、限界の向こうにあるものを見ていた。そのあるものとは「神の世界」と言うべきものであると言う。「神の世界」と「人間の理性」というこの2つは人間精神の「畏敬の念」「崇高な感情」という同じ根をもちつつバランスをとっていたことに注意をむける。

そして近代文明は、「畏敬の念」「崇高な感情」を見失ない、バランスをなくした科学主義、技術文明が制御できない無限運動を始め、その結果が経済発展と経済的利得以外の価値を消していったと捉える。

彼ら論者たちは今回の「想定外」という危機的状況については、そもそも技術は全て想定範囲内に於いて成立するものにすぎず、想定がなければ論理が成り立たない。論理がない技術などあり得ないと規定する。そのうえで、近代の合理主義、科学主義についてつぎのような論理を開示する。

近代の合理主義は価値を構成する諸要素のうち、計測可能なものだけが最大化され、目的となる。計測不可能な価値は市場経済と矛盾するという理由で考慮の外におかれがちとなった。数量化・形式化されるものだけに価

値をおくことから、人間精神における合理的能力への過信が occuri、人間精神のシステム化へとつながっていく。精神がシステム化されると精神の空無を埋めんとして「新技術」への熱狂が広がっていく。そして新技術の軽信によって未来も予測可能とみなし、危機を直視しないように努め、それから逃れようとさらなる技術の革新に依存する。しかし、危機は執拗に時代に襲いかかる。

したがって、今回の「想定外」の危機への責任は政府、企業、科学者にもとめられるべきものではなく、科学・技術そのものもっている隘路にもとめられるべきものである。そして、最大の原因は危機への畏怖の念を失念した我が近代人にあるという。この度の「原発」の危機は、人間の力の及ばない超越性・畏怖の念を勘定に入れない考え方が裁かれたのかもしれない。

「脱近代主義」への転換

さて、『表現者』の論者たちは、具体的に「原発」についてはどのように考えるのか。彼らは基本的にはこの問題については「脱近代主義」、すなわち「脱原発」の選択肢しかないとする。しかし、国際情勢との関係、再生可能エネルギーの供給問題など現実問題を考えると、今すぐ「脱原発」はあまりにもリスクが高いとの判断から、当面は「超近代主義」戦略をとるのが良いだろうという。原発をより安全性の高いものにするには技術の革新によって解決していくとする技術主義の延長にあるのが「超近代主義」であるが、この「超近代主義」と「脱近代主義」の2つをミックス

する二重戦略が現実的であろうという。つまり、しばらくは「超近代主義」を軸にしつつ、その中に「脱近代主義」を差し込んでいき、ゆくゆくは「脱近代主義」へと転換していくグラジュアリズムがベストな選択であろうという。

では、「脱近代主義」へと価値を転換していくにはどうすればよいのであろうか。これについては、200年、300年に一度の文明論的転回の大事件で、難問中の難問であり、妙案というのはすぐには出てはこないのが現状ではあろう。ここに登場する論者たちも、この場での具体的な政策論は提言はしていないが、重要な視点が語られている。それは「地域共同体」という言葉に盛り込まれている。

地域共同体の再生は可能か

東北の地域は、農業・漁業を主な産業としているが、農業・漁業は経済市場では計測不可能なものとして評価できない共同体意識を育み、その共同体意識によって支えられている。そのおかげで、東北地方は地域共同体、コミュニティーがいまだに残っていた地域である。

東北の地域共同体に住む人びとが今日まで保持していて、私たちに見せてくれた、愛郷心、隣人を思う心、我欲からは遠い心根、助け合いの精神、高い公共性、ほっこり人を包みこむ優しさ、我慢強さ。それらは、東北において長い歴史の中で醸成された深い人間文化である。この東北人の深い人間性は、私のなかで忘れかけ、朽ちかけていた感情であり、今回、懐かしく思い出されたものである。

こうした感情は人が人として生き、存在している実感を満してくれるものなのであるから、もとより私たち全ての人間にとって、大切なもの、失ってはならないものなのである。

だが、震災復興は、地域の人々を以前の地域共同体から剥がし去っていく行為になるであろう。西部邁氏はつぎのように言う。「文明は文化を破壊してきたとってよいくらいのものです」「『文化なき文明』は植物が枯れていくように朽ち果てていくでしょう」「・・・権力や計画がうまく機能するには、住民がその地に愛着をもち容易にはほかの地に移動しないことが、つまり人口の定住性が必要です。・・・人口移動を禁止することなどやってはならぬことです。しかし、『定住なければ文化なし』、それが地域再建の原則だということをおぼろげに忘れるわけにはいきません」。

溶解していく地域共同体・人間文化を再生していくのは並大抵なことではない。しかし私たち一人ひとりが、自分の手の届く範囲で地道なところから始めるしかない。たしかにあちらこちらからそうした再生の兆しが聞こえてきてはいる。その兆しのなかに光を見出していきたいと思う。(池田 季実子)

『技術への問い』

マルティン・ハイデッガー著 (関口浩訳)

平凡社 2009

—危険のあるところ、救うものもまた育つ—

ヘルダーリン

先端技術を問う

震災からしばし後、私はある経緯からこの書物を読むことになった。本書はハイデッガーの技術論をいくつか所収したものである。とはいえ、私は震災以後にわれわれが直面しているさまざまな問題にたいして、実践的な解答をここから引き出すことが出来たわけではない。問いが提起されただけであった。この問いを少しでも公共性の方へと解き放ち他者の批判の俎上にのせることが、本書をとりあげる理由である。

確かに、震災をめぐる技術的な議論は不可欠であるし、あるいは今後の日本の社会設計に関する議論に市民として参与することも重要である。その任を怠るわけではない。しかし、日本の直面する諸問題を本質的なレベルで検討するとすれば、やはり本質的な思想家の提起した問いを蔑ろにすることはできないだろう。この迂遠さと逡巡こそが、今日の人文知が担うことが出来るぎりぎりの誠実さである。

本書は、5つの論文からなっている。すべてハイデッガーが技術にかんして思索した論文からの精選である。それぞれの論文の初出情報と原文との対応関係、および関連文献は、

訳者が後記において詳細に紹介しているので、ここでは各論文のタイトルのみを提示しておこう。「技術への問い」(1953)、「科学と省察」(1953)、「形而上学の超克」(1936-46)、「伝承された言語と技術的な言語」(1962)、「芸術の由来と思索の使命」(1967)、の計5タイトルがそれである。

ハイデッガーは周知のとおり 20 世紀ドイツの最大の哲学者である。その仕事は、世界的な規模でさまざまな領域にわたり広範な影響を与え続けている。本書所収の論文においても、技術論が独自の問題系と関係づけられているが、筆者の能力からして、それを他の著作との関係から考察することはできない。

とはいえ、ハイデッガーの専門家ではなくとも、そこで展開される強靱な思索のエッセンスをつかむことはできる。訳者も書いているとおり、ハイデッガーの技術論の本質は、本書の第一論文「技術への問い」に凝縮されている。「技術への問い」は、1949 年のブレーメン・クラブでの講演をもとにした 1953 年のミュンヘン工科大学での連続講演の一環である。ここでは思想的・歴史的な文脈を還元してこの論文の要約に記述をしぼろう。

ハイデッガーは冒頭でこの講演の主題を提示する。「技術について問い、そのことによって技術との自由な関係を準備」ことである。さらに、「関係が自由になるのは、それがわれわれの現存在を技術の本質に開くときである」と述べる。

隠れたものを現前させるものとしてのポイエーシス

技術について問うならば、技術と技術の本質は異なるということを認めなければならない。なぜなら、ハイデッガーが問うているのは、具体的な技術のメカニズムや歴史的経緯ではないからである。われわれは、技術を価値中立的なもののみならず、「もっともはなはだしく技術のなすがままになる」のである。

通説によれば、技術の本質は、「技術は目的のための手段」であり、「技術は人間の行為」である。この二つの命題は、技術の本質として否定し得ぬほど正しいと、ハイデッガーは確認する。だが、正しさと真理は異なるという。われわれは技術の本質について問うているのだから、事実を確認するだけの正しさという概念では不十分である。本質をもたらすものが真理である。

技術が手段であるならば、そこには結果を実現するものとしての原因という概念を認めることができる。原因性とはなんであるか。古代ギリシアでは、原因はアイティオンという言葉で表現された。「責めを負うこと」である。

「責めを負うこと」は、いまだ「現前」していないものを到来させること、「誘発すること」である。たとえば、銀は職人によって儀式のための銀皿として現前するという具合に。プラトンはこれを「ポイエーシス」と呼んだ。なにかをもたらすこと、現前させることを意味する極めて広義の概念である。ハイデッガーは技術の語源、ギリシア語のテクネーという言葉を検討する。テクネーとは、隠れたも

のを現前させるものとして、ポイエーシスに属するという。

一つ一つの言葉を噛み締めるように、蛇行しつつ進むハイデッガーの講演を直線的に要約した。多少、拙速であるだろう。無論、今日の言語学の水準からいって、ハイデッガーの語源学的考察がどこまで妥当なものかはわからない。だが、われわれは議論の本質のみを確認しよう。テクネーは隠れたものを露にし、こちらへと出で来らすものである。テクネーはポイエーシスである。

近代技術は人間を挑発する

しかし、近代の技術は単にポイエーシスであるだけではない。近代技術は、現前させるもの（自然、人間）を挑発する。つまり、伏蔵したものを常に開発するように急き立てるのである。たとえば、風車と水力発電を比較してみよう。われわれは自然エネルギーを利用するだけでなく、地形を改変しエネルギーを開発するのである。ここに近代技術の本質がある。ハイデッガーはこの挑発しつつ、露にすることを「集-立 ge-stell」と名付ける。

「集-立」としての技術は、本質的に危険なものである。なぜなら、これはわれわれを挑発し、かえってその本質を隠し、思考することを妨げるからである。しかし技術そのものが危険なわけではない。技術の本質である「集-立」が危険なのである。ハイデッガーの問いは結論をむかえる。思索の課題とは、この危険、技術の本質を徹底的にみつめることで、自由な関係を模索することである。

ここにはなんらの実践的解決策も示されて

いない。しかしハイデッガーは技術そのものを、近代科学そのものを否定しているわけではない。技術的な問題は技術的に解決されるべきであるという立場をとっている。ハイデッガーは技術の本質にたいする問いそのものを厳密なかたちで提起しているだけなのである。

ハイデッガーの言葉はまさに生々しく私に届いた。われわれが直面した課題を、本質的な深さにおいて思考するならば、ハイデッガーの言葉を無視することはできないと私には感じられた。いま求められているのは近代技術を、ひいては近代社会そのものを本質において問いなおすことではなからうか。

(佐藤 臨太郎)